

平和運動センター通信 原水禁ヒロシマニュース

No. 220
2019年
8.9月号
(9月1日)

- 発行：広島県平和運動センター
原水爆禁止広島県協議会（広島県原水禁）
- 〒733-0013 広島市西区横川新町7-22 自治労会館 1階
- Tel:082-503-5855 FAX:082-294-4555
- E-mail:h-heiwa@chive.ocn.ne.jp
- 広島県原水禁 ホームページ <http://www.hiroshimaken-gensuikin.org/>
- ブログ：<http://kokoro2016.cocolog-nifty.com/shinkokoro/>

発行責任者
渡辺 宏
(事務局長)

—子どもや孫たちに、戦争も核もない、美しい地球を！—

反核・平和な社会を築こうと誓った「原水禁大会」が8月9日の長崎大会をもって終わりました。関係者の皆様のご協力にあらためて感謝申し上げます。

さて、「嫌韓」を煽る安倍政権は何を狙っているか。東アジアにおける平和の構築は、決して安倍政治が行う排外主義では達成できないのは明らか。過去の侵略戦争での過ちを認めない政治姿勢こそが問題。県原水禁・平和運動センターに結集する私たちは何をなすべきか。私たちは忘れさせられようとしている、「不幸な歴史」を振り返り「安倍政治の危険性」を見抜くことから始めなくてはならない。

―――目 次―――

- 1P：目次・当面の日程
- 2P：県原水禁が市長へ平和宣言に関する申入れ（7月8日：広島市役所）
- 3P：核兵器禁止条約早期発効を求めるキャンドルメッセージ（7月16日）
- 5P：朝鮮学校高校無償裁判第6回控訴審報告（7月9日）
- 7P：反核平和の火リレー到着（7月26日）
- 8P：被爆74周年原水爆禁止世界大会（7月2日～8月9日）

(資料) 11月1日 広島憲法のつどいチラシ
総がかり行動街頭ビラ (9.3配布分)

(9月・10月の主な取り組み)

- 9月3日：総がかり街頭行動（広島市中区本通17：30～）
- 9月9日：朝鮮の自主的平和統一支持広島集会実行委員会
朝鮮学園支援チャリティー公演実行委員会
- 9月12日：平和運動センター常任幹事会・県護憲幹事会
- 9月19日：戦争法成立から4周年・安倍政治糾弾街頭行動
- 9月29日：部落解放・人権政策の実現を求める第50回広島県民集会
- 10月3日：総がかり街頭行動
- 10月10日：朝鮮学校高校無償化控訴審裁判口頭弁論
- 10月24日：平和運動センター第25回定期総会（予定）

県原水禁・広島市長へ平和宣言に関する申入れ ～被爆地ヒロシマから核兵器禁止条約署名・批准を促す～

核兵器禁止条約の国連採択から2年が経過します。しかし唯一の戦争被爆国である日本政府がこの条約の批准を米国の核の傘のもとでの安全保障を理由に、批准も署名も行わない姿勢に対し、被爆地ヒロシマの被爆者や遺族、市民の思いを是非広島市長が行う8月6日の慰霊式において発信する「平和宣言」において是非とも強く署名や



批准を促してもらいたいと、7月8日に広島県原水禁として広島市長への申入れを行いました。

広島県原水禁からは、佐古正明代表委員、金子哲夫代表委員、渡辺宏事務局長ら4名が参加し、広島市市民局国際平和推進部津村浩部長に、下記の要望書を手渡し、今後の「平和宣言」策定にあたって、充分私たちの意見が反映されることを要望しました。

要望書の内容

8月6日の「平和宣言」についての要望

本年の平和宣言の中で、次の二項目について日本政府に強く求めて下さい。

- ・核兵器禁止条約早期発効のため日本政府がまず署名・批准すること
- ・早期発効のため日本政府が各国政府に働き掛けること

連日、広島市民の生活向上と核兵器廃絶に向けて努力されていることに敬意を表します。

間もなく、広島は74回目の8月6日を迎えます。しかし、広島市民の願いにもかかわらず、核兵器廃絶への道はいまだ明確となったとは言えません。そうした中であって一昨年国連で「核兵器禁止条約」が圧倒的多数の賛成で採択されたことは、核兵器廃絶を現実のものとする大きな道筋を与えるものとして、被爆者はもちろん広島市民、世界の人びとは心から歓迎しました。広島県原水禁も、こうした世界の動きと連動し、かつ被爆地「ヒロシマ」の運動体として、核兵器禁止条約の早期発効こそ、今世紀という時代に意味を与えるための有効な手段だと信じています。

私たち広島県原水禁は、1955年に開催された第1回原水爆禁止世界大会で採択された「ヒロシマアピール」の「原水爆が禁止されてこそ、真に被害者を救うことができます。」を運動の柱として、一貫して「核兵器廃絶」を訴え続け、その実現のため様々な取り組みを続けてきました。また被爆者の皆さんもその実現のため1955年2月様々な困難を克服し、被爆体験を証言するためイギリス、西ドイツを訪れた日詰忍さんをはじめ多くの被爆者が、世界各地を訪れ被爆体験の証言を通じて「核兵器の非人道性」を告発するとともに、「私たちのような思いを他の誰にもさせたくない」と訴え続けてきました。その被爆者のあきらめない努力が、世界の人々の心をとらえ、核兵器廃絶運動の推進力となったのです。

さらに「核兵器が非人道性兵器」であり、国際法に違反するものであることを明らかにすることができたのは、たとえば胎児にまでその影響が及ぶことを隠していた ABCC の情報を白日の下にさらした市民やジャーナリストの力がありませんでしたし、被爆後献身的に治療に当たった広島医療関係者たちの活動のお陰です。こうした被爆者や広島市民の様々な活動と願いが、「核兵器禁止条約」採択の大きな力となったことは、条約の前文からも明らかです。

そして、1995年の国際司法裁判所において、被爆都市である広島市長・長崎市長が、政府の意向に反して「核兵器は国際法違反である」旨の発言したことによってより明確になりました。これは、市長個人の見解ではなく、広島市としての公的な発言のものです。それは、市民への約束でもあったのですから、このことは、誰が市長になったとしても、後世に受け継がれなくてはならない重みを持っています。勝手に変更できることではないはずです。

広島市の訴えが、国際司法裁判所の勧告的意見として結実し、核兵器禁止条約へとつながったのですから、広島市としてより積極的な役割を果たす責務があります。すべての被爆者や広島市民は、日本政府が「核兵器禁止条約の署名・批准」することを強く求めるとともに、広島市長がそのための役割を果たされることを強く望んでします。それ以上に、広島市長がそのために、歴史に残る大きな役割を果たされることを強く望んでします。

被爆地広島を代表する貴職に置かれましても今年8月6日の平和宣言において明確に力強く「日本政府に対し、核兵器禁止条約の署名・批准」を求められるよう衷心からお願い致します。

以上

.....

ヒロシマの反核団体共同でキャンドルメッセー ～核兵器禁止条約の早期発効を呼びかける～

「核兵器禁止条約」が国連で採択されてから2周年を迎え、7月16日午後7時から原爆ドーム横で、「今こそ核兵器禁止条約の批准・発効を！」と求めるヒロシマ市民の声を世界に届けようとキャンドルメッセーのつどいが開催されました。

少し薄暗くなり始めた午後7時15分、午後5時過ぎから準備し整然と並べられているキャンドルに点火されました。浮かび上がった文字は「**RATIFY BAN NUKE S NOW! 2019**」で、「今こそ核兵器禁止条約の批准を！2019」に、参加者それぞれの思いが込められ、夕やみにしっかりと浮かび上がりました。

完成したキャンドルメッセージを前に、被爆者と若者のリレーメッセージが行われ、被爆者は、箕牧智之さんと、佐久間邦彦さんが被爆者の切なる願いを世界に届けるとともに、日本政府がその責務を果たすべきと訴えられました。

続いて、若者の代表として、高校生平和大使の牟田悠一郎さん（市立基町高校2年生）から、被爆者や多くの市民の核兵器廃絶を求める声をジュネーブに届ける役割を果たすとの決意が述べられました。

最後に主催者であるHANWAの共同代表森瀧春子さんが、「キャンドルメッセージのつどいの声明」を発表。参加者全員（約50名）の大きな拍手で採択され、集いは終了しました。



採択された「核兵器禁止条約の発効を求めるヒロシマ声明」は以下のとおりです。

2年前の2017年7月7日に、122か国の賛同によって核兵器禁止条約が国連で採択されました。核兵器は、存在も使用も威嚇も許すことのできない非人道的兵器であり、法的に禁止することによって人類が生きのびる可能性を圧倒的多数の国々が選んだのです。

核保有国や核抑止力政策を採る国々が核兵器禁止条約の実現を妨害しようとも、核兵器廃絶のために最も短い道である核の法的禁止は世界中の共通認識となりました。

私たち広島市民は、核兵器禁止条約制定2周年に当たり核兵器禁止条約の発効に必要な批准国を50カ国以上に挙げなければと世界中に、市民の描くキャンドル・メッセージでアピールします。

核利用サイクルの過程で引き起こされ、今なお拡大している甚大な核被害の問題、核戦争の危機を見据えることがヒロシマの課題です。

核開発による人類生存の危機を根っこから断ち切るべく、ウラン採掘、核兵器、原発、劣化ウラン兵器など核利用のサイクルによりもたらされている非人道的被害の原点から、あらためて「核と人類は共存できない」ことを確認し、国際的な連帯のネットワークを築くことを推進していきます。

「唯一の戦争被爆国」を名乗る日本政府は、核兵器禁止条約に反対し、核兵器廃絶への道を阻みつつ「核保有国と非保有国の溝を埋める橋渡し役を」果すと言います。しかし、自らは核依存政策を維持し、「橋渡し」どころか米トランプ政権などの核保有国の側に立ち、国際的溝を深め妨害しているのが実態ではありませんか。

同時に他方では、被爆の安全神話を振り撒き福島核災害を封印し、原発被害者を棄民にしようとしています。原発の再稼働、海外への原発輸出、自国の核保有の意図をも持つ使用済み核燃料再処理によるプルトニウムの備蓄など核利用サイクル政策を推進して国際的な疑念と不信を拡げています。

核兵器禁止条約が制定され支持する国際的潮流は押し戻すことのできない大勢となっています。ヒロシマ市民は、広島市長が被爆74年の原爆被曝の日に世界に発する広島平和宣言において日本政府に対し核兵器禁止条約の賛同国となることを要求するよう、私たち市民を代表して高らかに宣言することを求めます。

核兵器廃絶のための核兵器禁止条約発効の早期実現のため、国際的連帯を更に強める民衆の連帯の力こそが、核兵器廃絶のための最も有効な核兵器禁止条約の発効を実現するものだと思えます。

2019年7月16日

朝鮮学校高校無償化裁判第6回控訴審開かれる

7月9日広島高等裁判所において、広島朝鮮学校高校無償化裁判第6回控訴審が開始されました。控訴審はこれで6回目。午後2時から朝鮮学校の生徒や保護者、日本の支援者によって傍聴席が埋め尽くされた302号法廷で開廷されました。（満席で入れなかった人も多数いました）

日本政府は、すべての子どもたちの平等に教育を受ける権利を保障するため2010年から「高校無償化制度」（2013年からは「高等学校就学支援制度」）をスタートさせました。しかし外国人学校や各種学校がすべて対象となっている中で、唯一、朝鮮学校だけが除外され続けています。政治的な意図によって、全く何の責任もない子ども

たちが差別されています。これを不当として2013年8月1日に、広島では、学校法人朝鮮学園と当時の卒業生・在校生110人が原告となり、「国の行政処分の取り消しと適用」を求めるとともに、損害賠償を求めて裁判を起こしました。残念ながら、第1審では広島地裁小西裁判長よって、2017年7月19日に「朝鮮学園に学ぶ子どもたちの民族教育を受ける権利を認めない」不当な判決が出されました。原告は、直ちに控訴し、今日までに5回の控訴審が開廷されてきました。

第6回控訴審は、いつものように提出された書面の確認が終わった後、今後の審理の進め方が協議されました。その中で、控訴人側（原告）弁護士から、朝鮮学校の歴史を紹介する映画をこの法廷で上映することを求め、これについては今後協議することになり、協議の中心議題に入りました。1審の時から原告団が求めていた原告への尋問をどうするかです。まず裁判長から「学校長、原告1名、保護者の尋問を行う」との発言があり、被控訴人である国側弁護団もこれを認めたため、次回以降の法廷で原告尋問が実施されることになりました。次回（10月10日午後1時30分から）は、原告の一人である広島朝鮮初中高級学校の金英雄校長への尋問（原告側1時間、被告国が40分、

および裁判長）が行われます。そして次々回（11月20日の同時刻）には、原告で卒業生1名と保護者1名の尋問が行われます。少しでも道が開けたと思える第6回控訴審となりましたが、予断は許さない状況に変わりはありません。次回以降の控訴審が、非常に重要となります。



（控訴審後の報告集会：広島弁護士会館）

閉廷後は、弁護士会館に場所を移し、報告集会が開催されました。朝鮮高校を卒業し朝鮮大学校に通っている原告たちも、夏休みを利用しこの控訴審に参加していました。「朝鮮大学で、この裁判は人類史的な闘いだと言われました。東京で毎週行っている金曜日行動（広島では、毎月19日）に参加していますが、日本人も韓国人も参加してくれています。少しずつ輪が広がっているように思います。これからも勝利まで手を取り合って頑張りましょう」と東京での取組みの感想が述べられました。

最後に次回公判で尋問を受ける金校長から「いよいよだという思い、ちょっと緊張しているが、10月10日をめざして、きちんと準備し、朝鮮学校の正しさ、正当性を訴えていきたい」との決意が述べられ、報告集会は終わりました。次回10月10日の公判は、この裁判の大きな山場とも言えます。一人でも多く広島高裁に駆け付けることが、裁判を支援する力になります。ぜひ一人でも多くのご参加を！

（8月29日の朝日新聞に、東京の学校の裁判における、最高裁の不当な判決のニュースが報じられ、強い憤りの念を持ちつつこの記事を作成。）

反核平和の火リレーが無事到着

7月3日に、平和公園慰霊碑前を出発し、県内を走り継いだ「反核平和の火リレー」が、7月26日午後6時に無事広島平和公園の慰霊碑前に到着しました。

今年も期間中に大雨警報の影響で全区間を走破できない状況でしたが、全市町を約800人のランナーで走破しました。

午後6時、外国からの訪問者も多い原爆慰霊碑前に新田康博実行委員長を中心に10名のランナーがトーチを掲げ、到着しました。その中には、原水禁代表委員の金子さんの元職場で一緒であった仲間のお孫さん二人が、今年小学生となり、始めて参加していました。また今年初めてですが、車いすの障がい者の方も最終ランナーとして参加しておられました。



到着式では、最初に新田実行委員長から「残念ですが、今年も大雨の影響で一部実施不能となった区間がありましたが、全23市町を走破した」との報告がされました。「平和の火リレー」により「平和の灯」は確かに県内に燃え広がりました。

続いて、来賓として出席した各団体から祝福・労い

の言葉が送られ、県原水禁・平和センターを代表して、金子哲夫広島県原水禁代表委員からは、「今年は、被爆75周年を来年に控えた非常に重要な年。なんとしても『核兵器禁止条約』の発効を実現しなければなりません。皆さんの思いを受け止め、8月4日から始まる被爆74周年原水爆禁止世界大会でしっかりと討論し、運動を前進させます。」と労いと決意が述べられました。

「反核平和の火リレー」は、広島においては今年で38回目を数え、全国で20都道府県で取り込まれるに至っています。広島県平和運動センター・原水禁も若い人たちの反核運動の広がり期待し、この運動の支援を行っていきます。

～核も戦争もない平和な21世紀に！～

被爆74周年原水爆禁止世界大会報告

ヒロシマ・ナガサキに原爆が投下され74年、東京電力福島第一原発事故から8年が経つ今年、被爆74周年原水爆禁止世界大会は、7月27日の福島県教育会館で行われた「福島大会」を皮切りに、8月4～6日「広島大会」、8月7～9日「長崎大会」でその幕を閉じました。大会は各会場での総会や分科会・ひろばでの取組みへの参加だけでなく、炎天下での非核平和行進への参加を含め今年も多く多くの市民や労働組合員が「核も戦争もない21世紀を！」をめざして取組まれました。以下、広島での取組みの概要を報告します。

◆非核平和行進

東部コース：予定通り7月27日岡山県から引継ぎ福山市を出発し、尾道・三原・東広島・竹原・呉・海田・府中町を經由して8月3日に広島に引き継がれて、平和公園に到着。今年もすべての行進コースに自治労福山市職連合のユース部員の参加がありました。

今年は豪雨災害がなかったもののここ数年の、猛暑に対する熱中症対策として、3つのコースともに行進コース距離の短縮を行うなど見直しを行いました。



(東部行進団：7月27日福山市内)

北部コース：広島県独自のコースとしての北部コースは、7月31日庄原市役所を出発し三次・安芸高田市・広島市安佐南区、安佐北区などに引き継がれて8月2日広島西区横川第2公園（8月3日連合広島との共同行進出発場所）へ到着しました。



(北部行進団：7月31日庄原市内)

西部コース：8月1日山口県から引継ぎ大竹を出発、廿日市市・広島市西区に引き継がれて8月3日平和公園に到着しました。

大竹市内の国道2号線は交通量が多く歩道が狭いため、一昨年、行進参加者が車のサイドミラーと接触した事故があったことから、昨年から行進する道路を側道に変更したことにより事故の心配が薄れました。



(西部行進団：8月1日大竹市内)

8月3日午後3時に3コースからほぼ同時に平和公園に到着し、その後集結式が慰霊碑前にて行われ、無事に行進が平和公園に到着したことを報告し、核兵器廃絶に向けて今後も行進をはじめとする運動の強化を確認し合い、8月4日から行われる原水禁大会広島大会と8月5日に開催の連合の平和集会の成功に向けて決意を新たにしました。



(平和公園前を行進する連合広島の行進団)

◆折鶴平和行進

広島大会は8月4日、海外ゲストも参加し全国・地元からの参加者1,700人が午後3時半平和公園を出発し、「核兵器廃絶、脱原発、平和憲法を守ろう」などのシュプレヒコールを挙げながら行進し開会総会会場の県立体育館グリーンアリーナに集結しました。

折鶴平和行進は人数も多く、炎天下での行進であるため、出来るだけスムーズな出発と行進になるよう気を使い、開会総会開始までに行進が終わることを目標に行進団をリード、進行していただきました。団が離れないようスムーズに行うことができました。



◆開会総会・分科会・フィールドワーク・ひろば・まとめ集会概要

開会総会は県立体育館グリーンアリーナにおいて全国から1,900人が参加し午後5時に開会しました。第18代高校生平和大使を務めた脇原華怜さんの司会進行で始まり、最初に広島・長崎に投下された原子爆弾や世界の核被害で命を奪われた人々に黙祷を行いました。開会あいさつに立った川野浩一実行委員長より「核兵器はただの一発も存在



してはならない。米国トランプ大統領は、小型核兵器の開発やINF全廃条約の一方的離脱など、核兵器による平和と安定を強く打ちだしている。また日本政府もそれを支持していることが本当に許せるかどうか。安倍政権が進める平和と安定とは一体何か。核のない平和な社会のために全力を尽くそ

う」とあいさつを行い、広島市市民局長・海外代表の紹介・あいさつに続き、被爆者の訴えにはいりました。

被爆者の高品健二さんは「8歳の時、爆心地から2.5kmの自宅付近の用水路で、空襲警報が解除されて友達と遊んでいたとき被爆した。突然の青白い光と同時にすさまじい爆風により10m飛ばされ、ガラスが顔や耳に刺さり、友達も全身にガラス破片が刺さったまま自分の自宅に帰ったが、玄関を開けると家の中は倒壊していて、柱の下敷きになっていた母を何とか救い出し、叔父のリヤカーに母と友達を乗せ避難所へ移動していった。その途中、『水をください』という被爆者の声、火傷により皮膚が剥がれ落ちそうになりながら歩く多くの被爆した人々、遺体など、言葉では言い表せない悲惨な状態でした。避難所で数日後友達がなくなり、その数日後には母も亡くなった。その後も『原爆病』は移るといったデマも広がり、居場所のないつらい思いと生活を余儀なくされました。やがて自分は大阪に出て理容師になり、母の遺言の『どんなに貧しくても人に後ろ指をさされず真直ぐに生きていく』ことを誠実に守り今に至っています。これから何年生きられるかわからないが、命ある限り核のない世界に向けて、若い世代の人たちに思いを伝えていきます」と、参加者に訴えられました。

その後、広島県選出の第22代高校生平和大使の決意を受け、被爆者団体協議会の被爆証言活動と高校生平和大使の活動に対する会場カンパの呼びかけ、福島からの報告の後、藤本泰成大会事務局長から、①核を巡る世界状況、②核の商業利用（原子力エネルギー）の現状、③ヒバクシャ・核被害者への救護と連帯について「大会基調」が提案さ

れ、最後に広島音楽サークル協議会の伴奏により全員で「原爆を許すまじ」を合唱し開会総会を閉会しました。

5日は午前中に「平和と核軍縮」をはじめとする軍縮問題や「脱原子力」「ヒバクシャの現状と支援」など8つの分科会が開かれ、総計950人が参加しました。そして午後には「女性のひろば」「ヒバクを許さないつどい」「被爆二世・三世問題」など5つのひろばも開かれ、全国の取組みの交流が行われました。また、同じ5日には、昨年引き続き大久野島「ヒロシマと戦争」「安野発電所への中国人強制連行と中国人被爆の歴史を歩く」という2つのバスツアー・フィールドワークと、今年初めて原爆詩人である「原民喜の『夏の花を』を歩くと」というフィールドワークも行われ、合計155人が参加し、戦争の加害と責任、被爆の歴史に学びました。

6日には広島市主催の平和記念式典の開催後、午前9時30分から県民文化センターにおいて、「原水禁世界大会・広島大会」の締めくくりとして520人の参加で「まとめ集会」が開催されました。司会を務められたのは、広島県高等学校教職員組合の川原さんです。主催者の挨拶に続いて、昨日学生が中心となって作成した「メッセージFromヒロシマ2019」が映像をまじえて報告されました。作成したメッセージは長崎へ送られます。



続いて、海外ゲストを代表してマーシャル諸島における核実験による被曝被害とその被曝者支援活動を行っている状況について、支援運動家

「ラニー・クラマー」さんから報告を受けました。その後、特別報告として、沖縄県平和運動センター副議長の仲村未央さんから、「辺野古基地建設強行反対の現地の闘い」の報告と、引き続きこの運動への連帯の呼びかけがありました。まとめとして大会実行委員会藤本事務局長から分科会等のまとめの報告がされ、その後「広島アピール」を採択し、現地実行委員長の佐古

正明さんの閉会の挨拶で「まとめ集会」が終了しました。また、まとめ集会において、開会総会会場カンパが「413,861円」であったことが報告がされました。

まとめ集会で提案採択された広島大会「ヒロシマ・アピール」を掲載します。

被爆74周年原水爆禁止世界大会・広島大会「ヒロシマ・アピール」（案）

1945年8月6日午前8時15分、広島に投下された原子爆弾は、強烈な「熱線」、「爆風」、「放射線」のもと、その年の内に14万人もの生命を奪い去りました。あの日から74年、被爆者の高齢化は進み、限られた時間の中で、援護対策の充実と国家の責任を求めることが急務となっています。さらに、親世代の原爆被爆による放射線の遺伝的影響を否定できない、被爆二世・三世の援護を求める運動も重要です。

2017年7月7日、「核兵器禁止条約」は、国連において122カ国・地域の賛成多数により採択されました。現在、条約に調印した国は70カ国、批准した国は24カ国にのぼ

ります。発効に必要な 50 カ国に達するまでにはまだ努力が必要です。日本政府は、核抑止力論に固執し、被爆者や多くの国民の声を無視し、交渉に参加しなかったばかりか署名・批准を拒んでいます。

来年 2020 年には核拡散防止条約（NPT）再検討会議が行われます。原水禁、連合、KAKKIN は再検討会議にむけて、日本政府に条約の批准、NPT 再検討会議の成功を求める「核兵器廃絶 1000 万署名」を取り組むことに合意しました。日本政府の「核兵器禁止条約署名・批准」を実現させるため、原水禁運動の総力を挙げ、1000 万署名を成功させましょう。

核兵器をめぐる情勢は、大変きびしくなっています。特に、トランプ米大統領は、イランとの核合意からの一方的離脱、ロシアとの中距離核戦力（INF）全廃条約の失効、さらには使える核兵器開発を含む核態勢の見直し（NPR）を進めるなど、核廃絶の流れに逆行しています。私たちは、米朝首脳会談、南北首脳会談などが切り開いた新たな状況に、日本をはじめ、関係各国がどのように対処していくのか、私たちが求めている東北アジア非核地帯化構想の必要性について、改めて確認し、東北アジアの平和と非核化に向けた取り組みを進めていく必要があります。

日本政府は、南シナ海での米軍との共同演習などを通じて、日米軍事一体化を進めています。そのための軍事力強化を、米国からの対外有償軍事援助（FMS）によって、莫大な財政負担の下で強行しています。沖縄県辺野古では、沖縄県民の強い反対がある中で、在日米海兵隊辺野古新基地の建設を強行しています。東アジアでの共通の安全保障の確立によっては、軍事力によらない安全保障の構築は夢ではありません。自ら、周辺諸国との対立を呼び込み安全保障環境を悪化させ、市民社会と誠実に向き合うことのない安倍政権を許さず、沖縄県民の総意とともに辺野古新基地建設阻止にむけて、粘り強くたたかいを継続しなければなりません。

東日本大震災による福島第一原発の事故から 8 年が経過する中で、未だに 4 万人を超える被災者がきびしい避難生活を余儀なくされています。しかし、安倍政権は、避難指示解除準備区域や居住制限区域の解除を強引に行い、被災者の切り捨てを進めています。さらに安倍政権は、私たちの強い反対にもかかわらず、これまで 9 基の原発再稼働を強行し、原発に依存する政策を進めています。

私たちは、放射能汚染を強いられた人々の健康不安、特に子どもの健康にしっかり向き合い、「被爆者援護法」に準じた法整備を国に求めるとともに、原発再稼働や新・増設を許さず、全ての原発の廃炉、再生可能エネルギーへの転換を求めます。

原水禁運動の原点は被爆の実相です。被爆地ヒロシマを体験した私たちは、9 条を守り、憲法を守り、一切の戦争を否定し、二度と悲劇が繰り返されないよう訴え、行動していきましょう。

これまで、私たちは原水禁を結成し、54 年にわたり一貫して「核と人類は共存できない」、「核絶対否定」を訴え続け、核のない社会・世界をめざして取り組んできました。現在、暴走し続ける安倍政権の戦争への道、原発再稼働への道に対抗していくことが喫緊の課題であり、未来ある子どもたちに「核も戦争もない平和な社会」を届ける取り組みを全力で進めましょう。

ノーモア ヒロシマ、ノーモア ナガサキ、ノーモア フクシマ、ノーモア ヒバクシャ

2019 年 8 月 6 日

被爆 74 周年減衰履きウ禁止世界大会・広島大会

◆長崎大会報告（まとめ集会中心に）

8月9日、私たち広島県代表団18名は、閉会総会に先立ち、恒例の城山小学校慰霊碑参拝を行いました。午前9時、長崎総合体育館で始まった「長崎大会・閉会総会」は、松田圭治長崎実行委員長（長崎原水禁会長）のあいさつ、原水禁・非核平和行進のタスキを長崎から沖縄に返還。来年への引継ぎです。タスキを受けた山城博治沖縄平和運動センター議長が、「民主主義を破壊する安倍政権に絶対負けずに戦い抜く。皆さんも一緒にがんばりましょう」と力強く沖縄からのアピール。会場から大きな拍手が沸き上がりました。



続いて高校生のアピールです。第22代高校生平和大使と長崎の高校生1万人署名活動実行委員会のメンバー約100人が、ステージ中央へ。圧巻です。長崎大会の主役は、毎年平和大使と1万人署名活動実行委員会の高校生です。

海外ゲストの紹介、代表からのアピール、そして大会のまとめを藤本泰成大会

事務局長が提案。最後は、山下薫長崎大会実行委員が「被爆74周年原水爆禁止世界大会・大会宣言」が提案され、全体の拍手で確認しました。閉会集会後に、全国の参加者とともに長崎爆心地公園に向かって1.2Kmを非核平和行進。爆心地公園到着後、川野大会実行委員長と海外ゲスト代表のサマンサ・ハナグさん（マーシャル諸島・被曝三世）が全ての参加者を代表して中心碑に献花。原爆投下時刻の11時2分のサイレンを合図に全員で黙とうし、すべての被爆74周年原水禁世界大会の行事が終了しました。

（編集後記）

原水禁大会成功に向けてご尽力いただきました関係者の皆様に紙面をお借りし心より感謝を申し上げます。来年は被爆75周年という一つの節目になります。現在原水禁国民会議と協議しながら、福島原発事故や核兵器禁止条約などの「核」を巡る国際的・国内的課題の新たな局面が生まれていますので、学習教材としてDVD教材の豊富化など検討を行っています。大会内容についても今後の総括を経て充実させていきます。

10月、参議院議員選挙後初の臨時国会における安倍政権の姿勢如何で、改憲への動きに抗しうる運動の強化が課題となります。英気を養い力併せて奮闘あるのみ。

